

国語

(解答番号

1

33

111

115

)

第1問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

目的さえわかれば、それですぐ具体的にどう行為すべきかもわかると考える誤りは、正義感に燃えがちな若い人々などによって犯されやすい誤りではないでしょうか。青年たちはある目的が正しいと考えると、現実の状況というものをまったく考慮せずに、ただいちずにその目的を実現しようとする傾向があります。そしてわれわれがどういう手段を用いてその目的を実現すべきであるかというのを慎重に考えないようになるのではないのでしょうか。

a、世界平和の**カクホ**という目的が正しいとすれば、どういう行為をすべきかということがただちに決定されると考えたり、民衆の貧乏からの解放という目的が正しいとすれば、どういう社会を実現すべきかということがすぐきまってくると考えたりすることは、この種の例なのではないかと思われまふ。もとよりすべての青年がこういう考えをするというわけではありませんが、青年のうちにもこういう考えをする人が少なくないということは否定できないのではないのでしょうか。

世界平和のカクホということはいまでもなく正しい目的といえるでしょう。bこの目的を実現するための手段として、なにがもつとも有効か、ということとは、けっしてこの目的からだけで決定できるものではありません。この手段をきめるためには、われわれは現実の世界的政治情勢など多くの事実についての知識をもつて、その基礎の上に立って判断しなければなりません。

また、貧乏から人々を解放するということが目的として正しいことも、もちろんでしょう。しかしこのことはまだ、この目的の実現のためにどういふ社会組織がもつとも適当であるかということを示

すものではありません。この問題を決定するためには、われわれは**X**に政治的、経済的な知識の上に立って判断を下さねばなりません。

われわれがこのように単に目的のみから手段としての行為まで決定されると考えると、われわれは**A**非現実的な観念のからまわりをする事になりまふ。それは非科学的となつてしまひまふ。それは、**※**ドーンキホーテ的な態度に外ならないといえまひまふ。

しかし逆に、われわれは行為を決定するのに目的など不要だと考えることもできません。cこう考えると、われわれは、ただ現実の状況のみを**※**顧慮して、結局なんの理想もなく現実に順応するという態度をとるようになってしまふでしょう。目的だけで具体的行為まで決定されると考えると誤りが、若い情熱をもつた理想主義者の犯しやすい誤りであるとするれば、目的を見失つてただ現実の情勢**⑥**ブンセキから行為をきめようとする誤りは、**Y**な現実主義者の陥りがちな誤りであるといえまひまふ。青年が前者の誤りを犯しがちであるとすれば、年をとつて分別くさくなると、われわれは逆に**B**この後者の誤りに陥りやすくなるのではないのでしょうか。

このようにただ現実の情勢のみから行為を決定しようとするれば、おそらく多くのばあい大きな危険は存しないといえるかもしれまひまふ。しかしそこには、同時になんの理想も存在しませぬ。哲学というものは存在しませぬ。そしてわれわれはただ現実の波に動かされて、**◎**セイイ眼界の中の最善の行為を選ぼうとするに外なりませぬ。それはいわば、目かくしをつけられた**※**馬車馬が、自分の視野の範囲の中でどう歩くべきかということを考えているようなものだ、といえるのではないのでしょうか。

(中略)

哲学と科学が対立するものと考えられるのは、ただ哲学がその本

来の領域を越えようとし、また C 科学が自分を万能と考えようとするときです。

哲学が価値判断という問題を取り扱うにとどまらず、事実の問題にまで、口をさしはさもうとすると、そこには当然科学との ① ショウトツが生じてきます。d、科学は事実についての知識を得ようとするものですから、もしも哲学が事実について科学とは異なった知識をもつことができると主張するならば、科学が正しいか哲学が正しいか、という問題が生じてくるからです。

※わたくしはさきに、近世になってから、自然科学をはじめとして多くの科学が哲学から独立していったことを述べましたが、それはそれ以前の哲学にあつては、価値の問題と事実の問題とが Z に分けられていず、そのため哲学は事実の問題についても発言する権利があると考えていたからではなかったかと思うのです。

このことは、たとえばその当時の哲学が、「自然の奥には神の力がある」というような主張をしていたことを見てもわかると思われます。「自然の奥に神の力がある」ということは、それ自身としては事実に関する判断です。なぜなら、それは自然の奥に事実神の力があるということとを述べているからです。しかし同時にそれは、神の力というような価値的な概念を考えることによって、価値判断という意味をもっていることは否定できません。その奥に神の力が存するなら、自然というものもまた価値高いものであるという見方が、そこに含まれることになるからです。このように価値の問題と事実の問題が区別されていなかったため、哲学は事実についても判断を下しようと考えられていたわけです。こうして哲学は科学と対立したのです。

しかし、事実についての判断に関しては、哲学は科学に ② ユズらねばなりません。なぜなら、人間は事実について知ろうとするとき、単に事実がいかにあるかということを知ることができるのみであり、この人間の知識の D 本質的性格をはっきり自覚したのが科学であったからです。単に事実がいかにあるかということにとど

まらず、事実の奥にある E 本質をとらえようとした当時の哲学は、この点でまったく誤っていたといわねばなりません。科学は成功し、そして哲学に対して不信の目を向けて、続々と哲学から独立してゆきました。

だが、このことはけつして哲学にとつて悲しむべきことではなかったのではないかと思われれます。なぜなら、このことによつて、価値と事実の問題がまったく異なるものであるということとを、われわれは十分に知ることができたからです。われわれは哲学の領域は価値判断であるということをはっきり意識すべきです。そうすれば、哲学が科学と対立するというような誤解はまったく氷解してしまうでしょう。

(岩崎武雄 『哲学のすすめ』 一部改変)

※(文中のことばの意味)

ドンニキホーテ的な態度 : : よく考えずに物事に取り組み態度。

顧慮 : : あることを考えた上で、気づかうこと。

馬車馬 : : 脇目もふらず目前に集中することのたとえ。

わたくしはく述べました : : 本文より前の箇所、自然科学・経済学・社会学・心理学などが、哲学から独立していったことが述べられています。

問1 線①～⑥のカタカナを漢字に直しなさい。

解答番号は裏面の111、115。

① 「カクホ」 111

② 「ブンセキ」 112

③ 「セマ」 113

④ 「ショウトツ」 114

⑤ 「ユズ」 115

問2 a、dに入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は1。

① a もし b しかし

② a たとえば d なぜなら

③ a もし b なぜなら

④ a たとえば d しかし

c c

c d

問3 X・Y・Zに入る語として最も適当なものを、次の①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号はXが2、Yが3、Zが4。

- ① 保守的
- ② 革新的
- ③ 抽象的
- ④ 具体的
- ⑤ 意識的
- ⑥ 無意識的

問4 線A「非現実的な観念のからまわりをする」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は5。

- ① 目的を決定するためには、基礎的な知識に基づいて判断する必要があるから。
- ② 正義感に燃える若い人々は、目的しか重視せず現実の状況を一切考慮しないから。
- ③ 目的達成のための行為選択には、事実に関する知識に基づいて判断する必要があるから。
- ④ 目的のみから手段まで決定されるとする考えは、非科学的であるから。

問5 ———線B「この後者の誤り」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **6**。

- ① 現実の情勢から行為を決定することで、大きな危険を避けようとすること。
- ② 理想を追い求めるばかりに、足もとの現実を忘れてしまふということ。
- ③ 現実の状況ばかりに気を取られ、最善の行為を選べなくなってしまうということ。
- ④ 自分の視野のなかで起こる出来事に対応するばかりで、哲学や理想を無くしてしまうということ。

問6 ———線C「科学が自分を万能と考えようとする」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なもの、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は **7**。

- ① 科学は事実に関する知識を得るものであるので、哲学よりも人間の知識の本質的性格を自覚しているということ。
- ② 科学は事実に関する知識を得るものであるので、科学は哲学に不信の目を向け独立していったということ。
- ③ 科学は事実に関する知識を得るものであるが、価値の問題も解決可能な領域だと思ひ込むこと。
- ④ 科学は事実に関する知識を得るものであるが、哲学では事実について科学と異なった知識を持つことはできないと主張すること。

問7 ———線D「本質」、E「本質」について、両者の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は **8**。

- ① D「本質」は、事実に関する判断が単にいかにあるかにとどまるといふ人間の知識の性格を表しており、E「本質」は、哲学の領域が価値判断であるといふ哲学本来の領域を表している。
- ② D「本質」は、単に事実がいかにあるかということとどまらない科学的知識の性格を表しており、E「本質」は、自然の奥にある神の力を表している。
- ③ D「本質」は、事実についての判断は哲学ではなく科学の領域だとする人間の知識の性格を表しており、E「本質」は、科学で得られる知識とは異なる哲学でしか得られない事実に関する知識を表している。
- ④ D「本質」は、事実についてはどうあるかということしか知ることができない人間の知識の性格を表しており、E「本質」は、事実の奥に存する価値的な概念を表している。

問8 本文の表現と構成についての説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選びなさい。ただし、解答の順序は問いません。解答番号は 9 ・ 10。

- ① 科学と哲学を対比的に論じていることで、両者の共通点を明確に示しながら主張を展開している。
- ② 近世の哲学の「自然の奥には神の力がある」という主張は、筆者の論とは反対の立場からの考え方であり、近世哲学の誤りを示すために引用されている。
- ③ 世界平和の事例や貧乏の事例を、手段によって目的が決定されるわけではないということの具体例として示すことで、自説の説得力を補強している。
- ④ 「ドン・キホーテ的な態度」や「目かくしをつけられた馬車馬」という表現は、ともに「正義感に燃えがちな若い人々」の誤りを指摘するものとして用いられている。
- ⑤ 本文（中略）以前では具体的な面における目的と手段の違いを論じ、（中略）以後では一転して概念の領域における価値の問題と事実の問題の違いについて論じている。
- ⑥ 本文（中略）以前と以後で本文が大きく分けられているが、文章全体を通して、価値の判断と事実の判断とを区別すべきという主張を一貫して展開している。

第2問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

岡山に在住していた「私」(朋子)は、小学校に入学して間もなく父を亡くし、それ以後、母は縫製工場の勤めと洋裁の内職で家計を支えていた。しかし、「私」が中学へ入学する前に、母は今後の生活を安定させるため、東京の専門学校で洋裁の勉強をする決心をした。そのため、「私」は小学校卒業と同時に一年間、兵庫県芦屋に住む伯母夫婦に預けられることになった。その家には、一つ年下の従姉妹のミーナ(美奈子)という病弱な女の子がいた。

私が芦屋市立図書館へ通うようになったのは、川端康成の自殺がきっかけだった。
「お願いがあるんやけど」
土曜日の午後、ミーナが言った。

「図書館で、本、借りてきてくれない？」

阪神電車打出駅の北にある芦屋の図書館までは、家から車でせいぜい十分くらいの距離だったが、車酔いのひどいミーナにとっては耐え難い遠さだった。※ポチ子の歩行許可が下りているのは通学路のみだったので、彼女に乗って行くわけにもいかず、必要な場合は※小林さんに頼んで借りてもらっていたらしい。

「庭の仕事だけでも大変なのに、わざわざ図書館まで行ってもらうの悪いし、小林さんの年齢からしてたぶん、『赤毛のアン』とか『少女ポリアンナ』を借り出すのんは、恥ずかしいんやないかと思うの。もちろん小林さんはそんなことは言わないけど、代わりに朋子が行ってくれたら、気が楽なんよ」

「もちろんいいよ。でも、家にこれだけ沢山本があるのに、まだ

よそから借りてこなくちゃならないの？」

「そう私が尋ねると、ミーナはびっくりしたように目を見開いて、

「だって世の中には、一生掛かっても到底読みきれないぐらいの本があんのよ」
と言った。

「うん、まあねえ。で、何を借りてくればいい？」
「川端康成」

※「ロザおばあさんが、家にもあるって言ってたじゃない」
「『伊豆の踊り子』と『雪国』と『古都』ね。あれはもう読んでしまった。だからそれ以外をお願い」

「それ以外って、例えば？」
「朋子が前に読んで、面白かったんがいい。それやったら間違いない」

「えっ」

I 川端康成の小説を読んだことは、一度もなかったのだ。それどころか誰の書いた本であれ、小説と名の付くものを最初から最後まで読み通した記憶さえ、あいまいだった。日本人で初めてノーベル文学賞を獲った作家の作品を、中学生にもなって一つも読んでいないとは、それはまずいかもしれない。私は少し焦った。

「じゃあ、適当に見繕って借りてくる」

II

開森橋から乗ったバスは、散ってしまった桜並木の脇を通り、踏み切りを渡り、いくつも停留所に止まりながら住宅街の中を走った。正直に言えば、A川端康成の小説を知らないで恥ずかしい思いをすることよりも、図書館へ行くという仕事を任された喜びの方が、私にとつては重要だった。芦屋へ来て以来ずっと私は、この家

の人たちの役に立ちたいと思っていた。ミーナが発作を起こした夜、皆には大事な役割があったのに、私一人、何の手助けもできなかった。ああ、朋子がいてくれてよかった、と思ってもらえるような時がくるのをずっと願っていた。だからミーナの代わりに図書館へ行つて本を借りることなど、① お安い御用なのだった。

打出天神社の向かいにある図書館は、石造りの重厚な建物だった。立派な樹木に囲まれ、蔓草が壁面を這い、古めかしい両開きの扉には中国風の飾りがはめ込まれていた。中は石の冷たさがこもったようにひんやりとし、規則正しく並ぶ背の高い本棚が、通路の隅に薄ぼんやりとした影を作っていた。そこは私が知っている岡山の小学校の図書室とも、児童館の図書コーナーとも違っていた。もっと② 大人びていて、威厳があった。

「あのう、貸出カードを作りたいんですけれど」

カウンターにいる男性に向かって私は言った。

「初めてですか？」

その人は他の司書たちとは違い、一人だけカジュアルな装いで、白いつくりのセーターを着ていた。

「はい」

「生徒手帳持ってますか？」

「はい、これです」

私は学校でもらったばかりの手帳を出して見せた。

「よろしいです。そしたらこの用紙に鉛筆で、必要事項を記入して下さい」

その人は痩せて背が高く、うつむくたび、長く伸ばした髪がさらさらと額に垂れてきた。まだ若くて大学生のように見えるのに、仕事ぶりは落ち着いていて、きつと長く図書館に勤めている人なのだろうという感じがした。本を扱う手つきは丁寧でありながら無駄がなく、図書館の静寂に溶け込む穏やかな声を持っていた。

「川端康成の本はありますか？」

私は尋ねた。

「もちろん」

とつくりのセーターさんは、顔を上げて答えた。

「8番の本棚の脇に、追悼コーナーを設けてあるからね。そこで探したらいい。しかし、それにしても残念な出来事でしたね」

「はい」

私たちは一緒に8番の本棚の方向を見やった。

「例えば、どんな小説が面白いでしょうか」

「中学生で川端を読むなんか、偉いね、君」

とつくりさんは善良そうな微笑を浮かべた。

「いいえ」

慌てて私は首を横に振ったが、偉いのは私ではないという説明をすると、かえって彼の善意を③ 踏みにじるような気がして、本当のところを口にするのができなかった。

「『伊豆の踊り子』はどうかかな？」

「あつ、それはもう読んだんです」

「ほう」

とつくりさんは心から感心している様子だった。ますますこの人ががっかりさせる訳にはいかないという気分になってきた。

「あとは、『雪国』と、『古都』も……」

B 私は心の中で、嘘をついているのじゃない、ただ主語を省略しているだけだ、と自分に言い聞かせた。

「すごいやないか」

本を読んでいるだけで、こんなにも人からほめてもらえるということに戸惑って、私はうつむいた。もちろん本当にほめてもらうべきなのはミーナだと、よく分かっていた。

「そんなら、『眠れる美女』、はどうやろ」

とつくりさんはカウンターに手をつき、首を傾け、私に顔を寄せようとして言った。

「……美女……」

III

まるで目の前の感じのよい図書館司書か

ら、君は美女だと告白されたかのように、C 動揺してしまった。

「それは、まだ読んでません」

「そやったら、薦めますね。君にぴったりすのの小説やと思うんだ」
確かにそうだ。『眠れる美女』なんて、ミーナにぴったりすのの題名だ。もしかしたらこの人は、すべてお見通しなのかもしれない。私はただのお使いにすぎず、川端康成の本を求めると、*の美女は、山の上の洋館で待っているに違いないと、ちゃんと見破っているのではないだろうか。そうでなければ私に、美女の本など薦めるはずがない。そんな思いが一度に浮かんできて渦を巻き、D ますます私を動揺させた。

「さあ、これが君の貸出カードだ。大事に使うんよ」

とつくりさんは出来上がったばかりのカードを私に手渡した。お手本を見せるように、大事に手渡した。触れた指先がひんやりとしていた。

「はい、もちろんです」

と、私は答えた。

あの日、とつくりセーターの青年と約束したとおり、三十年以上たった今でも、私はE 芦屋市立図書館の貸出カードを大事に持っている。それはすっかり茶色に変色し、角は磨り減っているが、芦屋での一年間に私が借りた、つまりミーナが読んだ本の題名は、まだ消えずに記されている。一番上の『眠れる美女』から順番に一つ一つ題名をたどってゆくだけで、その時一緒に過ごしたミーナとの場面が浮かんでくる。秘かにとつくりさんとあだ名をつけた司書の青年と、カウンター越しに交わした会話も、よみがえってくる。

『アーサー王と円卓の騎士』『アクロイド殺人事件』『園遊会』『フラニーとゾーイー』『はつ恋』『変身』『阿Q正伝』『彗星の秘密』……。それらは単なる題名に過ぎないのに、私たちの思い出が不変なものであることを証明するための、刻印のように見える。ミーナに会いたくなるといつでも私は、この貸出カードを取り

出す。

ミーナは待ちきれずに玄関ホールのベンチに座っていた。
「大丈夫だった？ 道に迷わへんかった？ 本の借り方、すぐに分かった？」

ミーナは駆け寄ってきてあれこれ質問した。

「うん。うまくいった。はい、これ」

私は『眠れる美女』を差し出した。ミーナはすぐさま本を胸に抱き寄せ、私が払ったささやかな労力の、何倍もの感謝を示してくれた。予測どおり、胸に抱かれた『眠れる美女』は、彼女にとってもよく似合っていた。

F とりあえず、とつくりさんのことは、黙っておいた。

(小川洋子 『ミーナの行進』 一部改変)

※(文中のことばの意味)

ポチ子：ミーナの家で飼っている動物のカバ。病弱なミーナ

は、このポチ子に乗って通学することを許可されている。

小林さん：ミーナの家で長年出入りしている庭師。
ローザおばあさん：ドイツ人の、ミーナの祖母。

問1 〓線a〓cの文中における意味として最も適当なものを、あとの①〓④のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は 11 〓 13。

a 「お安い御用」 11

- ① まったく苦ではないこと
- ② とても気後れすること
- ③ たいへん面倒なこと
- ④ もっとも重要なこと

b 「大人びていて」 12

- ① 寒々とした物静かな雰囲気
- ② 厳かなたたずまいの雰囲気
- ③ 秩序が保たれたような雰囲気
- ④ 大人しか入れないような雰囲気

c 「踏みにじるような」 13

- ① 薄らげるような
- ② 傷つけるような
- ③ 遠ざけるような
- ④ 後押しするような

問2 I 〓 III に入る最も適当なものを、次の①〓⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号は I が 14、II が 15、III が 16。

- ① と言って誤魔化すしかなかった
- ② その言葉は私を馬鹿にするものだった
- ③ 私は言葉に詰まってしまった
- ④ その一言が頭の中でこだましていた
- ⑤ と、すぐさま言わざるを得なかった

問3 〓線A 〓川端康成の小説を知らないで恥ずかしい思い

をすることよりも、図書館へ行くという仕事を任された喜びの方が、私にとっては重要だった」とありますが、ここでの「喜び」とはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを、次の①〓④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 17。

- ① ミーナが頼みごとをしてくれたことで、長年家に入出入りする小林さんよりも信頼されていることが証明できるといふ「喜び」。
- ② ミーナが頼みごとをしてくれたおかげで、小説をまったく読んだことがない自分でも少しは役に立てると気づかせてくれた「喜び」。
- ③ ミーナが頼みごとをしてくれたことで、その役割を果たすことによりミーナ家の一員であるという実感を持つことができるという「喜び」。
- ④ ミーナが頼みごとをしてくれたおかげで、今までミーナのために何もできなかったという後悔をすべて解消できるという「喜び」。

問4

——線B「私は心の中で、嘘をついているのじゃない、ただ主語を省略しているだけだ、と自分に言い聞かせた」とありますが、ここでの「私」の心情はどのようなものですか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は18。

- ① 川端康成の本を読んでいるのはミーナであることは確かなので、自分に向けられた青年司書の感心と善意に対して何ともいえない罪悪感を抱いている。
- ② 川端康成の本を読んでいるのが実はミーナであるという真実を、目の前で親切に対応してくれている青年司書にどのように伝えるべきかと思い悩んでいる。
- ③ 川端康成の本を中学生が読んでいることに青年司書が感心し親切に対応してくれているので、ミーナに対して真実を打ち明けられない自分を申し訳なく感じている。
- ④ 川端康成の本を自分が読んでいると青年司書は勘違いしているにもかかわらず、もつとほめてもらいたいという気持ちを抑えきれずミーナのことは忘れようとしている。

問5

——線C「動揺してしまった」、D「ますます私を動揺させた」とありますが、ここでの「動揺」の違いについて説明したものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は19。

- ① 前者は自分に向けられた青年司書の好意から生じた「動揺」であり、後者はその好意をどのように受け止めるべきか戸惑う気持ちから生じた「動揺」である。
- ② 前者は本の題名が自分に向けられていると感じたことから生じた「動揺」であり、後者はその気持ちとミーナに対する後ろめたさが混在する気持ちから生じた「動揺」である。
- ③ 前者は紹介された本の題名の意外さから生じた「動揺」であり、後者は青年司書がその本をまだ読んでいないことを知っていたという驚きから生じた「動揺」である。
- ④ 前者は青年司書からほめられたことから生じた「動揺」であり、後者はそのことで揺れ動く気持ちを青年司書が気づいてくれないもどかしさから生じた「動揺」である。

問6

——線E「芦屋市立図書館の貸出カード」とありますが、この「貸出カード」は「私」にとってどのようなものだと考えられますか。文章全体をふまえたうえで、その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。
 解答番号は 20。

- ① 芦屋市立図書館の「貸出カード」は、ミーナ家で過ごした一年間の思い出や図書館で出会った青年司書と交わした会話を今でもよみがえらせてくれる、人生のなかで特別なものだと考えられる。
- ② 茶色に変色し角が磨り切れた「貸出カード」は、時の経過を感じざるを得ないが、ミーナと過ごした一年間は色あせることのない事実であることを物語っており、「私」の少女時代を生きた証^{あかし}だと考えられる。
- ③ 本を借りるために作った「貸出カード」は、母親と離れ孤独な生活をしていた一年間の中で、青年司書との出会いを導いてくれ、歳月が経った今でも「私」の淡い思い出がぎゅっしり詰まっているものだと考えられる。
- ④ 「貸出カード」に記された数多くの本の題名は、ミーナにとって時間の経過を表すとともに心の成長がみられるものとして刻まれており、歳月が経った今でも「私」が病弱なミーナのことを思い気遣うものであると考えられる。

問7

*に入る語として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 21。

- ① 自由奔放
- ② 完全無欠
- ③ 奇想天外
- ④ 正真正銘

問8

——線F「とりあえず、とっくりさんのことは、黙っておいた」とありますが、それはなぜですか。その理由を説明したものと最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 22。

- ① 好感の持てる青年司書に選んでもらったという事実を言ってしまうと、もしかしたらミーナに奪われてしまうかもしれないと思い、その気持ちを抑えきれなかったから。
- ② ミーナは「私」が読んで面白いものがないと信頼してくれているのに、青年司書に選んでもらったと告げることはミーナを裏切ってしまうことになると思ったから。
- ③ 自分が選んだ本ではないにもかかわらず、その本を抱き寄せ「私」に感謝するミーナの前に、好意を抱く青年司書に選んでもらったという事に申し訳なきを感じたから。
- ④ 「私」の帰りを玄関先で待ちかねるほど本を読むことに執着しているミーナに、図書館での青年司書とのやりとり的一部始終を伝えることが馬鹿げたことだと考えたから。

問9

次の文は、芦屋市立図書館の司書である青年の呼び名の変化と「私」の心情について説明したものです。□ア・

□イに入る語として最も適当なものを、あとの①～⑥のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。

解答番号はアが□23、イが□24。

青年司書と図書館で初めて出会った時は、□アな視点により「他の司書たちとは違い、一人だけカジュアルな装いで、白いとつくりのセーターを着ていた」と表現されている。

しかし、その青年の仕事ぶりや丁寧な対応によって、「私」の青年に対する□イが増していくにつれ、「とつくりのセーターさん」から「とつくりさん」と変化していくことがわかる。

- ① 比喩的
- ② 客観的
- ③ 主観的
- ④ 親しみ
- ⑤ 愛しさ
- ⑥ 焦り

問10

この文章における表現と内容について説明したものとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は□25。

① 「私」が芦屋市立図書館へ通うきっかけとなった「川端康成の自殺」は、父の死と重なることになり、これから始まるミーナ家での生活が孤独で辛い一年間になることを予期させるものとなっている。

② 図書館の雰囲気やそこで働く青年司書の指先を「ひんやり」という語で感覚的に表現することにより、その場所に出入りすることやその人物と関わるのが、「私」には不釣り合いであることを暗に示している。

③ この文章は、「過去」の出来事を回想しただけのもではなく、「あの日、とつくりセーターの青年と約束したとおり、三十年以上たった今でも…」と挿入し、「貸出カード」を介して、当時の思い出は「私」にとって「現在」も変わることのないものとして象徴的に示されている。

④ 会話を主体とした文章で、「私」の発言は短く示されているのに対し、ミーナや図書館の青年司書の発言は長く示され書き分けられていることにより、登場人物の性格がはっきりと浮かび上がるようになっている。

第3問 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

昔、※天竺てんちくに一寺あり。住僧もつとも多し。※達磨だるま和尚この寺

に入りて、僧どもの①行うかがひを窺たみ給ふに、ある※坊には念仏

し、経を読み、さまざまに行ふ。ある坊を見給ふに、八九十ばかり

なる老僧の、ただ二人ゐて※困あ碁を打つ。仏もなく、経も見えず。

ただ困碁を打つ外は他事たじなし。達磨※件くだんの坊を出でて、他の僧に

問ふに、答へて曰く、「この老僧二人、若きより困碁の外はする

事なし。すべて仏法の名をだに聞かず。よつて寺僧、憎みいやし

みて※交会する事なし。②むなしく※僧そう供を受く。A外道ぐのごとく

思へり」と※云々。

和尚これを聞きて、「B定めて様あらん」と思ひて、この老僧が

傍かたはらにゐて、困碁打つ有様を見れば、一人は立てり、一人は※居

りと見るに、※忽然こつぜんとして失せぬ。あやしく思ふ程に、立てる僧

は※帰りゐたりと見る程に、またゐたる僧失せぬ。見ればまた出で

きぬ。「Cさればこそ」と思ひて、「困碁の外他事なしと承るに、

※証果の上人しやうにんにこそおはしけれ。その故を問ひ奉たてまつらん」とのた

まふに、老僧答へて曰く、「◎年来この事より外他事なし。ただ

し、黒勝時は我が※煩惱勝ちぬと I、白勝時は※菩提勝

ちぬと II。打つに随したがひて、煩惱の黒を失ひ、菩提の白の勝た

ん事を思ふ。この※功德によりて証果の身となり侍はべるなり」とい

ふ。

和尚、坊を出でて、他僧に語り給ひければ、年来憎みいやしみつ

る人々、後悔して、みな貴たふとみけりとなん。

(『宇治拾遺物語』)

※(文中のことばの意味)

天竺：…インドの古称。

達磨和尚：…五、六世紀の人。南インドのバラモン国の第三王子。中国に渡り禅を興した高僧。「和尚」は模範となるす

ばらしい僧の呼び方。

坊：…部屋。

囲碁 … 白黒の碁石を並べて勝負を競う遊び。
件の … その。

交會 … つきあうこと。

僧供 … 供養のため、僧に贈る金銭や米のこと。

外道 … 仏教以外の他の宗教を信じてない人。

云々 … 引用したことばのあとの部分を省略する場合に用いることば。

居り … すわっている。

忽然 … すぐに。

帰りぬたりと見る程に … 帰って来てすわったと見るうちに。

証果の上人 … 修行を続けて立派に悟りを得られたすばらしい僧。

煩惱 … 人間を悩ませるいろいろな思い。

菩提 … 煩惱を断って悟りの境地に入ること。

功德 … よい行い。

問2 ———— 線A「外道のごとく思へり」とありますが、このとき

の寺僧たちの心情として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選

びなさい。解答番号は **29**。

① 一緒に囲碁を打ちたい。

② 一緒に住みたくない。

③ 一緒に僧供を受けたい。

④ 一緒に仏法を聞きたくない。

問3 ———— 線B「**I**・**II**」に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選

びなさい。解答番号は **30**。

① **I** 悦よろこび

② **I** 悦よろこび

③ **I** 悲しみ

④ **I** 悲しみ

① **II** 悦よろこぶ

② **II** 悲しむ

③ **II** 悦よろこぶ

④ **II** 悲しむ

問1 ———— 線①～③の文中における意味として最も適当なものを、あとの①～④のうちからそれぞれ一つずつ選

びなさい。解答番号は **26**、**27**、**28**。

① 「行ひ」

② 行為

③ 行事

④ 修行

① 「むなしく」

② 無気力に

③ 無関心に

④ 無意味に

① 「年来」

② ふだん

③ 長い間

④ だいたい年齢

① 結婚するのによい年齢

問4 ———— 線B「定めて様あらん」とありますが、その解釈として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選

びなさい。解答番号は **31**。

① 決して様子はわからないだろう。

② きつと様子がわかるだろう。

③ 決して理由はないだろう。

④ きつと理由があるだろう。

問5

——線C「さればこそ」とは、「やはり予想していたとおりだった」という意味ですが、ここに込められた和尚の心情として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 32。

- ① この二人の老僧はただ者ではなかったのだ、という失望。
- ② この二人の老僧はただ者ではなかったのだ、という確信。
- ③ この二人の老僧を憎みいやしんでいた、という心配。
- ④ この二人の老僧を憎みいやしんでいた、という後悔。

問6

本文の内容と合致するものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 33。

- ① 仏法の名を聞いたことがないほど念仏に熱中している老僧の二人が、実は悟りの境地に達していた上人であった。
- ② 仏法の名を聞いたことがないほど囲碁に熱中している老僧の二人が、実は悟りの境地に達していない僧であった。
- ③ ひたすら囲碁に熱中しているだけと思われていた老僧の二人が、実は悟りの境地に達していた上人であった。
- ④ ひたすら囲碁に熱中し、仏法にも念仏にもくわしい老僧の二人が、実は悟りの境地に達していた上人であった。

これで問題は終わりです。